OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	コメント２ ： 空間理論をめぐる一考察 ： 公共空間におけるジェントリフィケーションから
Author(s)	鹿野, 由行
Citation	日本学報. 2015, 34, p. 39-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51375
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

コメント２：空間理論をめぐる一考察
――公共空間におけるジェントリフィケーションから――

鹿　野　由　行

ここでは表象そのものから少し離れ、「風景」について論じられる際の空間に関する議論について、とりわけ特定の人々の排除をあらかじめ前提とする公共空間について取り上げ、若干の考察を述べさせていただき質問をさせていただきたいと思う。

写真や絵画はその性質上、二次元的であり、過去のある時点での被写体の姿を留めることに特化しているが、佐藤さんは「風景」という三次元的であり変化するものも同時に分析の対象に捉えられている。ある表象がどう受け取られたかを読み解く表象分析を用いて、三次元的であり時間軸の中に存在している「空間」そのものをどのように分析されているのか、あるいは分析が可能なのかお尋ねしたいと思う。

佐藤さんは著書『トポグラフィの日本近代』の中で、トポグラフィを意味作用の実践として捉えるために、ミシェル・ド・セルトーの「場所（place/lieu）」と「空間（space/espace）」の対立概念について触れられている。そしてそれらをさらに発展させたものとしてW・J・T・ミッチェルによる「空間・場所・風景」について説明する際に、極めて重要となる社会学者アンリ・ルフェーブルによる三つの概念カテゴリーを紹介している。

①「知覚される空間（l'espace perçu）」――あるいは「空間的実践（la pratique spatiale）」とは、セルトーのいう「空間」であり、日常的な実践の結果として出来上がるもの。

②「思考される空間（l'espace conçu）」――あるいは「表象の空間（les représentation de l'espace）」とは、セルトーのいう「場所」に該当し、都市計画者、建築家によって構想されるものである。

③「生きられる空間（l'espace vécu）」――あるいは「表象の空間（les espaces de représentation）」とは、「支配された、それゆえに受動的に経験された空間」であり「イメージや象徴によって媒介されたもの」、ミッチェルの述べる「風景」であると述べられている。そして上記の三カテゴリーはそれぞれが「論理的に、時系列的に先立つということはない」とされている。

佐藤さんの著書の一章「トポグラフィとしての名所絵――江戸泥絵における都市の表象」では、江戸町人のアクティビティを描いた浮世絵に対し、武家が支配する平穏な空間としての泥絵という、全く異なる描かれ方が対比されていた。「空間的ベクトルを読み取るこ

とにほかならない」という言葉が示しているように、同じ江戸（例えば葵坂）が見る（描く）者のまなざしによって大きく異なって描かれることは、空間の多面性・重層性を示していると言える。空間（例えば江戸・葵坂）は誰のものでもないとともに、誰でも解釈可能な個人それぞれのものでもあるだろう。

近年、アーティスティックにデザインされた公園などを都市の公共空間の中に見ることが多い。その中には、人が寝ることが出来ないようにするため肘置きによって三等分した三人がけのベンチなど、人が寝ることができないよう設計されているものも多い。新宿西口の地下通路に置かれたオブジェなどは特に有名だろう。都築響一はこうしたオブジェなどを「ホームレス排除アート」や「ギザギザハートの現代美術」と呼んでいる。

公園（だけでなく建築物や公共空間）は建築家や都市計画によって構想され創られるわけだが、それらはアンリ・ルフェーブルの②「思考される空間」（都市計画者、建築家によって構想される空間）に当てはまるだろう。また、創られた空間は③「生きられる空間」、つまり「公園」として受動的に理解され利用されるとともに、①「知覚される空間」として不特定多数の利用者の日常の実践が行われる。

近年、日本の都市研究や地理学では「ジェントリフィケーション」が重要な議論の一つとなっている。ジェントリフィケーションとは、社会学者ルース・グラスが1964年にロンドンで生み出した言葉であり、「民間資本とミドルクラスの住宅購入者や賃借人が流れ込むことでインナーシティの貧民や労働者階級の近隣が改造される」過程であるとされてきた。だが、今日では「都市中心部の景観の階級的改造」を企てるものであり、より様々なコンテクストに応じて捉えることが重要であると地理学者ニール・スミスは『ジェントリフィケーションと報復都市』の中で述べている。

誰にでも開かれた「公」の空間であるはずの公園が、「ホームレス排除アート」など特定の人々を排除することを念頭に置いて建設されている現状はすでに述べた。アメリカでは1980年代からジェントリフィケーションとアートの共犯関係について、「支配的な文化を再生産」し、「近隣を飼い慣らす手段」としてのアートの果たした側面が指摘されている。

今日、構想され創られた空間は、利用者にイメージ通りに消費・利用することを強いる。計画者の意図しない、それ以外のあり方や利用について許さない形での空間形成が行われているのである。このような排除は公園だけではない。すでに述べたが、都心部では地下道の出入り口は深夜になるとシャッターで閉鎖され、広場をモニュメントが占め、彼らをその場から追い出す。完成予想図として描かれたイメージ画の通りに建設されたそれらの中には、特定の人々が組み込まれていないだけではなく、排除する意図がアートによって覆い隠されつつ構想されそして使用される。北田暁大はこれらについてセキュリティ社会

についての文脈の中で「環境管理型権力」の象徴として捉えている（『限界の思考』）。

ルフェーブルの三つの空間概念は、それぞれが「論理的に、時系列的に先立つということはない」ことはすでに述べた。それらを指摘しながら、ミッチェルはニューヨークのセントラル・パークを例に「「風景」として消費される（そしてそのように消費されるように設計されている）」とし、「空間的な活動が場所を生産し、修整しているともいえるであろうし、場所の属性がある空間的な活動を可能にし、それ以外を疎外しているともいえよう（したがって、空間とは能動的で動態的な言葉であるというド・セルトーの考えにもかかわらず、場所も一種の行為体であるとみなされよう）」と述べている。そこには、利用者による積極的な空間の書き換えが可能であり、空間と利用者は相互作用の可能性を含む関係にあることを示している。

しかし、「排除アート」にみられる一連の空間は、相互作用や積極的な誤読の解釈可能性を否定しているように思われる。そこは建築家や都市計画者による②「思考される空間」が強力に支配しており、その支配の下③「生きられる空間」というイメージが形成され、①「知覚される空間」となっている。計画者によって排除するよう意図され創られただけではなく、意図された空間の使用以外の可能性が否定され、積極的な排除（時には公権力による）が、アートによって覆い隠されるとともに、セキュリティの文脈と表裏一体となって存在している。

今日の都市空間においては、計画者による「思考される空間」は過去にないほどの強力な力をもって都市を支配していると言わざるを得ない。それは建築によって暗黙のうちに排除し、カメラによって監視し、そして警備によって排除を実行する。空間と利用者の相互作用的な空間形成さえ許されない、現在の高度に洗練され支配することを構想された都市において、空間のありようについて私たちは再度考える必要があるだろう。

佐藤さんはこれまで写真や絵画の分析について空間概念を用いて表象分析されてきたが、三次元の「空間」そのものをどのように考えるべきか、お尋ねしたいと思います。

高嶺さんには、これらの「排除アート」と呼ばれる一連のオブジェに対し、アートに深く関わる方としてどのように捉えているのかお聞きしたい。ホームレス者を含め地域との融和や、共生といったテーマや意図を持ったアート作品も今日多く見られるが、それらの作品自体に排除の意志がなくても、結果としてジェントリフィケーションに加担する可能性もあると考えられる。中村葉子は大阪の「釜ヶ崎グラフィティアート」や「Breaker Project」を事例にアートがこれまでの日常風景を否定し、「「貧乏人」は追い出され」ると指摘する。このような一連の問題に対し、コメントをいただきたい。

コメント２：空間理論をめぐる一考察（鹿野由行）

そしてもう一点。高嶺さんの『在日の恋人』の中に登場したDQナジャ・グランディーバは、破壊と創造を司るかのように神格化されて描かれていたように思う。高嶺さんの作品の中では、しばしば「異形」な人々が清濁併せ持つ絶対的な存在のように描かれることが多いように私には感じられた。90年代、クィアという概念が広まり、DQなどのジェンダー倒錯的なパフォーマンスが称揚される一方で、トランスした身体は保守的であるとして批判されてきた。そしてその後、その構図自体が批判されたという流れがあるが、高嶺さんの作品の中には、「異形」なパフォーマティブな何者かに大きな力が与えられているように思う。これらの位置付けについてお聞かせ願いたい。

方法論の会　コメントペーパー

2014年11月27日

鹿野　由行

●ミシェル・ド・セルトーの「場所（place/lieu）」と「空間（space/espace）」の対立概念　から

W・J・T・ミッチェルによる「空間・場所・風景」について

→社会学者アンリ・ルフェーブルによる三つの概念カテゴリー

①「知覚される空間（l'espace perce）」――あるいは「空間的実践（la pratique spatiale）」

セルトーのいう「空間」であり、日常的な実践の結果として出来上がるもの

②「思考される空間（l'espace conce）」――あるいは「表象の空間（les representation de l'espace）」

セルトーのいう「場所」に該当し、都市計画者、建築家によって構想されるもの

③「生きられる空間（l'espace vecu）」――あるいは「表象の空間（les espaces de representation）」

「支配された、それゆえに受動的に経験された空間」であり「イメージや象徴によって媒介されたもの」、ミッチェルの述べる「風景」

⇒それぞれが「論理的に、時系列的に先立つということはない」

●ジェントリフィケーション・・・社会学者ルース・グラスが1964年にロンドンで生み出した言葉

「民間資本とミドルクラスの住宅購入者や賃借人が流れ込むことでインナーシティの貧民や労働者階級の近隣が改造される」過程

→「都市中心部の景観の階級的改造」を企てる物、より様々なコンテクストに応じて捉えることが重要

●質問

- ある表象がどう受け取られたかを読み解く表象分析を用いて、三次元的であり時間軸の中に存在している「空間」、とりわけ現代の都市空間そのものをどのように分析されているのか、あるいは分析が可能なのか。
- 上記の空間の３カテゴリーは現代都市において、バランスが崩れている（②の全体的な支配）ように感じられる。現在の都市空間においてこれらの概念をどのように捉え直すべきか。

- アートの持つジェントリフィケーションへの意識／無意識的な加担について、どのように思われるか。
- 「異形」な（クィアな？）身体の称揚についてどのように考えられているのか

Key word：ホームレス排除アート、都築響一、新宿西口、オブジェ、五十嵐太郎、過防備都市２

（しかの　よしゆき　大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）